

SHOW HEY シネマルーム

★★★

Data

監督：謝晋（シエ・チン）

出演：劉曉慶（リュウ・シャオチン）

／姜文（チアン・ウェン）／

徐松子（シュイ・ソソツ）

／祝士彬（チュウ・シーピン）

／鄭在石／劉利年（リュウ・

リーニエン）

芙蓉鎮

(Hibiscus Town)

1987年・中国映画・165分

配給／東光徳間

2004（平成16）年7月4日鑑賞

<シネ・ヌーヴォ・中国映画の全貌2004>

👁️👁️ みどころ

中国の黒澤明といわれる謝晋（シエ・チン）監督と姜文（チアン・ウェン）と劉曉慶（リュウ・シャオチン）のコンビによるこの映画は、1988年日本でも大ヒット。張藝謀（チャン・イーモウ）監督の『活着』（94年）と同じように、新中国建国後の反右派闘争や文化大革命の嵐の中で翻弄されながら生き続ける人間の姿を描いたこの映画は、すばらしい感動作！『黄色い大地』（84年）、『紅いコーリャン』（87年）と並ぶ必見の中国映画だ！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<はじめて見た劉曉慶という女優>

私は、この『芙蓉鎮』という映画ではじめて中国の大女優、劉曉慶を観ることができた。1987年の『紅いコーリャン』で、当時北京中央戯劇学院2年に在学中の鞏俐（コン・リー）が衝撃のデビューを果たすまで、劉曉慶は中国映画を代表する女優だった。もちろん鞏俐の登場後も、劉曉慶の女優としての活躍は続いたが、その話題と注目は鞏俐に集中した。劉曉慶が今日までその名前を残しているのは、この劉曉慶は女優としてのみならず、実業家としても大成功をおさめたという、中国では珍しい、というより唯一人の存在だからだ。この劉曉慶の公私にわたるダイナミックな活躍ぶりについても、『中国映画の明星—女優篇』（石子順著・2003年・平凡社）で詳しく解説されているので是非これを参照してもらいたい。

<劉曉慶の脱税事件、最新情報>

2002年7月30日、劉曉慶が、その支配下におく不動産関係など多数の企業での脱税容疑によって逮捕されたことがメディアで報道された。その脱税額は1000万円を上

回る巨額のもの。劉曉慶はこの『芙蓉鎮』や『春桃』『西太后』などのヒロイン役を演じて人気女優の地位を確立したうえ、1990年代に入ってから、不動産や化粧品などの実業界に進出して巨万の富を築いていた。改革開放政策の結果拡大した貧富の差はますます広がるばかりだった中国だが、「法治主義」意識の強い中国では、納税意識は希薄。そこで富裕層の脱税に憤慨した朱鎔基首相は、2002年6月、脱税を厳しく取り締まるよう国税当局に命じたとのこと。そしてその翌月、劉曉慶の逮捕に踏み切ったのは、彼女はずっと以前から捜査当局にマークされていたことを示すもの。2004年1月、劉曉慶の脱税容疑は確定し、1646万円の徴収も既に完了し、追徴課税は約300万円とのことだ。これによって、劉曉慶のヒロインとしての名声は一気に地に落ちてしまったこと確かだが・・・。

<姜文という俳優>

『紅いコーリャン』（87年）で、圧倒的な迫力の演技を見せた姜文は、中央戯劇学院在学中の22歳の時に、『悲劇の皇后 ラスト・エンプレス』（日本では未公開、ビデオのみ）の溥儀役に映画デビューした俳優。『紅いコーリャン』と同じ、1987年公開の『芙蓉鎮』では、当時24歳の姜文が、当時既に中国映画界のトップ女優であった32歳の劉曉慶と共に共演し、映画の中では劉曉慶より年上の分別のある男を見事に演じている。

<姜文と劉曉慶との私生活、そして2度のダブル受賞>

姜文と劉曉慶は、この『芙蓉鎮』での共演がきっかけとなって意気投合し、2年後の『春桃』では恋愛関係となり、『春桃』撮影中には同居生活を始めたとのこと。この『芙蓉鎮』の秦書田（チン・シューティエン）役で姜文は百花賞最優秀主演男優賞を、胡玉音（フー・ユイイン）役で劉曉慶は最優秀主演女優賞をダブル受賞した。さらにこの2人は、1989年にも『春桃』で、百花賞最優秀主演男優賞、最優秀主演女優賞をダブル受賞している。

<ヒロインの胡玉音とウスノロの秦書田>

映画の冒頭では、女主人公の胡玉音ともう1人の主人公秦書田との格差はくっきりと大きいもの。すなわち、米豆腐食堂の若奥様として夫と共に朝から晩まで勤勉に働いている胡玉音は、近所でも大人気。そして結構お金も貯めている様子。それにひきかえ秦書田は、共産党を批判した右派分子と認定され、労働改造をさせられている立場。つまり地主や富農たちとならぶ「五悪分子」の1人だ。

そんな働き者の胡玉音は、土地改革を担当している怠け者の王秋赦（ワン・チウシア）（祝士彬／チュウ・シーピン）から土地を譲ってもらって（もっともこの仕組みは、私にもよくわからないが・・・）、新しい家を建て、今は盛大な新築祝いの真っ最中・・・。

<出る杭は打たれるもの・・・>

営業許可もないのに堂々と店を営業し、おいしくて安い米豆腐を出しているのがこの食堂。このように多くの客を集めている店の女主人である、働き者で美人の胡玉音は、ひがみ目の女たちからみると何かと気に入らないのは当然のこと。その1人は、すぐ近くで国营食堂を営んでいた李国香（リー・クオシアン）（徐松子／シュイ・ソンツウ）。そしてもう1人は、胡玉音の兄貴分を自称しているかつての胡玉音の恋人で、今は芙蓉鎮の村で書記をしている黎桂桂（劉利年／リュウ・リーニエン）の妻。自分は子供2人を抱えて一生懸命働いているのに、夫は政治活動三昧のうえ、何かと美人の胡玉音の応援ばかり・・・。

そんな不満がピークに達したのは、胡玉音が自宅を新築し盛大な披露パーティー（？）をやった時。本人たちは一生懸命働いているだけで、何も「搾取」などしていないのだが、万事「平等」でなければならぬ共産党の目からみると、この夫婦は目立ってしまう。そして、出る杭は打たれるものだ。

今は共産党の政治工作班長に出世した李国香は、胡玉音の所得調査や米の横流し調査等に乗出た。そして名指しこそしなかったものの、これを「政治集会」で発表した。さあこれは大変。このままでは・・・？

<動けば動くほど事態は悪化するばかり・・・>

従来、胡玉音を「応援」していたのは兄貴分の黎桂桂と余りものの米を横流ししていた谷燕山（鄭在石）。谷燕山は解放戦争中にキズを負って退役した元軍人だが、人間味があるうえ根性のすわっているオッチャン。だが、何事も形式的に処理しなければならない李国香にしてみれば、黎桂桂や谷燕山たちのこういう行動は、胡玉音の女性としての魅力に影響を受けた、反階級闘争的で反革命的なものを見せてしまう・・・。李国香から睨まれたことを悟った胡玉音は、まずは貯めていた現金1500元を隠すため、これを黎桂桂に預けることに。しかし、これは第1の読みまちがい。黎桂桂はいったんこれを預かったものの、この件を妻に相談したから事態は最悪の方向に。ついに黎桂桂は自らこのお金を持って李国香の元へ報告に行く羽目に・・・。

次の誤りは胡玉音が自分への追及を避けるため、一時的に親戚の家に身を隠したこと。しかしそこにも長期滞在をすることができなかった。1人家に残った夫は善良だが気の小さい人物。胡玉音のように腹がすわっていないため、怒りのあまり、李国香を殺そうとして、逆に・・・。夜中ひそかに家に戻ってきた胡玉音には、こんな思いもかけない悲劇が待ち受けていた。そして遂に胡玉音は「新富農」と認定され、「人民の敵」となることに。すべてを奪われた胡玉音は、強制労働として、毎日芙蓉鎮の村の石畳の掃除がその任務として与えられた。

<文化大革命による権力の変動は・・・？>

1966年に文化大革命が始まったが、そんなある日、引きずられるように芙蓉鎮の村の中に連行されてきたのは李国香。李国香は、若い紅衛兵たちからつるし上げられ、雨の中、破れ靴を首からつり下げられ、さらしものにされる事態に。もちろん胡玉音も秦書田も同じ扱いを受けたのだが、胡玉音と秦書田は既に慣れっこ。しかし、それまでこの村の権力の中核にいた李国香にとっては、なぜ自分が「糾弾」されるのかわからないまま。したがって、その惨めさには想像を絶するものがあるはず。

この権力構造の変動によって、新たに芙蓉鎮の村の共産党の実権を握ったのは、今まで土地改革担当で惨めな思いをしていた怠け者の王秋赦。これによって彼は急に元気になり、わが世の春を謳歌。そして黎桂桂を自らの側近として重用し、今日も政治活動、明日も政治活動の毎日。ところが、県の集会から戻り、これを村人たちに報告しようとした王秋赦が見たものは・・・？そこには再び「復活」し、自分の上司として戻ってきた李国香の姿が・・・。そこで王秋赦が李国香に対してとった行動は・・・？何とも劇的な権力変動の実態に私はただ啞然とするばかり・・・。

<耐える中で誕生する愛！>

胡玉音と秦書田は寒い日も暑い日も、くる日もくる日も毎日、芙蓉鎮の村の石畳の道の掃除。秦書田はウスノロと呼ばれているが、これは世を欺くための仮の姿！秦書田は元県の文化会館館長をつとめていたインテリだが、自らの才覚をひたすら隠して生き抜き、反右派闘争や文化大革命の嵐が過ぎ去るのをじっと待っている知恵者だ。胡玉音は、当初は自分が不幸に陥ったのは、自分の結婚式で秦書田が変な祝い歌を歌ったり、看板に変なものを書いたためだと秦書田を恨んでいたが、日々改造労働の掃除を繰り返す中、秦書田の本心が理解できてきた。そして自分が病気で倒れた時、看病してくれた秦書田のやさしさも・・・。そんな中、次第に2人の間にはホンモノの愛が・・・。世間から隠れ、その目をかいくぐりながらの2人の恋だったが、そんな中、胡玉音のお腹には新しい生命が芽生えていた。

<感動的な2人だけの結婚式、そして・・・>

いくら虐げられていても結婚式はきちんと挙げたい。そんな2人はホントにささやかながらも精一杯の正装をして、今日は2人だけの結婚式。そんな2人を訪れたのはあの退役軍人の谷燕山。2人がこっそりと酒とサカナを買っているのを見て、事態を把握したとのこと。さすが長い間いろいろな経験をしてきただけのことはある。このオッチャンはホントにいい人・・・。

<反革命分子の結婚は認められるのか？>

果たしてこの2人の結婚は認めてもらうことができるのか？秦書田は丁寧な結婚嘆願書

を書いてこれを王秋赦の下に持参して報告したが、胡玉音が妊娠していると聞いた王秋赦は、「反革命夫婦というスローガンを家の前に貼り付けろ！」と命令した。胡玉音は悲しんだが、秦書田にしてみれば、反革命だろうが何だろうが、これは夫婦であることを認めてくれたのだから、思惑どおりと喜んだ。このようにして、単純な王秋赦はうまく処理できたものの、李国香はやはり無理だった。2人の結婚そのものが反革命行為とされて裁判にかけられ、まず秦書田には懲役10年の刑が言い渡された。続いて胡玉音にも懲役3年の刑が言い渡されたが、子供が生まれることを考慮して、その執行は猶予された。このため、ついに2人は離ればなれになってしまうことに……。この公開裁判での判決言渡のシーンが、この映画の1つのハイライト。そこで、腹の底から絞り出すような声で秦書田が胡玉音に対して言う「ブタになっても生きろ！」「牛馬となっても生き抜け！」という言葉は本当に迫力があり、このシーンだけで思わず涙がボロリとなること受け合い……。

<文化大革命もいつかは終わるもの……>

1966年に始まった文化大革命は1977年に終了した。そしてこの間に迫害を受け、追放されていた多くの人々の「名誉回復」が次々と……。しかし秦書田の名誉回復はやっと1979年になってからだった。

スクリーン上は、芙蓉鎮へ帰るための渡し船の中。1人荷物を抱えて船の中に立っている秦書田は、真新しい車と共に村に戻ってこようとしている李国香と再会した。秦書田の顔を見てやっとその名前を思い出した李国香は、「あなたの名誉回復の書類には私がサインをしたわ」と……。これを聞いた秦書田は怒りをじっとおさえながら、「庶民をバカにせず、庶民的な家庭を築いて下さい」と返したが、その心の中は一体どうだったのだろうか……？

<感動的な父子の再会>

さあ、やっと名誉が回復されて芙蓉鎮に戻ってきた秦書田は、はじめてその息子と再会することができた。これは本当に長い間じっと耐えに耐えた秦書田の我慢のたまものだ。そして胡玉音に対しても、死んだ夫は返してもらえないものの、新築しながら不当に没収された家が返され、押収されていた1500元も返還されることに。今さらそんなものを返してもらっても……。本当に返してもらいたいものは……。？しかし何はともあれ、秦書田と胡玉音との間にやっと平穏が戻ってきた。米豆腐の店を再び切り盛りする胡玉音とこれを支えて働く秦書田の姿は実にイキイキとしたものだ。

そんな時、秦書田に届いたニュースは、もとの文化会館の館長に復職できるというものだったが、秦書田には今さらそんなものは無用の長物。今はただ胡玉音と一緒に生活できればそれだけで十分……。

<何とも暗示的な王秋赦の姿>

今はハッピーとなった胡玉音と秦書田の店の前を、ドラを鳴らし「政治運動が始まったぞ！」と叫びながら通りかかったのは王秋赦。激動する政治状況の中で、多くの浮き沈みを経験した王秋赦は、その重圧に耐えきれなくなり、気がふれてしまったのだ。もちろん今は幸せな秦書田も、この幸せがいつまで続くのかわからない。ただどんな時代状況においても、自分を見失うことなくしっかりと生きていくこと、それが大切だということが秦書田には十分わかっていた。

この意味で、この映画のラストはすごく暗示的・・・。

<日本でも大ヒットの『芙蓉鎮』>

この『芙蓉鎮』という映画は、1987年の中国における観客動員ベスト10位を占め、4544万8000人もの人が観たとのこと。また日本では1988年に東京の岩波ホールで公開され、7万人の観客を集める大ヒットになったとのこと。私はこの映画のタイトルとおよその内容は知識として持っていたが、こんな感動作だとは思わなかった。『黄色い大地』（84年）や『紅いコーリャン』（87年）が世界に衝撃を与えたのと同じように、この『芙蓉鎮』が世界に与えた感動をこの映画を観てはじめて十分に理解することができた。それもこれもシネ・ヌーヴォーでの「中国映画の全貌2004」開催のおかげ。シネ・ヌーヴォーに感謝しなくては・・・。

<芙蓉鎮というまち>

この映画が最初に映し出す時代は、1963年春の中国。文化大革命の3年前だ。そしてその舞台は、タイトルどおりの芙蓉鎮という村。

今私の手に『2004升級版中国古鎮游 全国220个經典古鎮』という中国語のガイド本がある。これは私が2004年3月31日～4月3日に杭州旅行に行った際、杭州空港で38元（約500円）で購入したもので、700頁余りの分厚い本。もちろん私は中国語は読めないが、所詮漢字で書いてあるのだから、この程度のガイド本なら、それを読めば（見れば？）概要を把握することはできる。この本はタイトルどおり、中国の古いまち220箇所を案内したもので、その268～271頁に芙蓉鎮のまちが紹介されている。実は私はこれが載っているのを見てこの本の購入を決めたもの。

この本によれば、芙蓉鎮は王村と呼ばれていたまちで、湘西豆腐香で有名。そして芙蓉鎮の老街や牌坊などの写真が掲載されている。またそのラストには、この映画に登場した胡玉音の「米豆腐店」の店と看板の写真が掲載されており、米豆腐がその「特色美食」として紹介されている。このように、何でも興味をもって勉強すればいろいろと楽しいものだ・・・。

2004（平成16）年7月5日記

芙蓉鎮



原題：芙蓉鎮
 出演：劉曉慶、姜文
 監督：謝晋
 製作年：1987年
 DVD販売元：紀伊
 國屋書店（2006
 年発売）
 時間：164分

中国の選り抜かれた優秀な監督と姜文と劉曉慶のコンビによる『芙蓉鎮』は、1988年に日本でも大ヒットした。反右派闘争や文革の嵐に巻き込まれながら生き続ける人間の姿を、抑々必死の中国映画といえる。

米豆蔲食費の若殿様として夫と共に勤働に働いている胡玉音（劉曉慶）は近所でも大人気だ。それにひきかき秦書田（姜文）は右派分子と認定され、『労働改造』に服している。しかし、働き者で美人の胡玉音は、ひがみ目の女たちからみると気に入らない存在。その二人が、国営食堂を営んでいた李國春（徐松子）そんな不満がトクに達したのは、胡玉音が自らを新築した盛大な披露パーティを開いた時。政治工作班長に出世

文革の嵐を生き抜く人間の姿を描く感動作

した李國春が胡玉音の所得調査やロマの順流しの調査に乗り出し、遂に『新畫體』と題して二人の敵となってしまう。全てを奪われた胡玉音には、秦書田と一瀬に村の石畳を掃除する任務が与えられた。秦書田と親しくなる中で、秦書田が実は自分の真意を隠し、文革の嵐が過ぎ去るのを待っている知識者や気づき。そんな中で二人の間には次第に愛が生まれるが…。

『芙蓉鎮』は87年の中国における観客動員ベスト10位にランクイン、約454万人が観た。私は映画のタイトルとおよその内容は知っていたが、これほどの感動作とは思わなかった。姜文と劉曉慶は『芙蓉鎮』出演によって、それぞれ最優秀主演男優賞と女優賞を受賞、また共演がきっかけで真気殺台、国恩を始めたり。

その後劉曉慶は『春桃』や『西太后』などのヒロイン役を演じて人気女優の地位を確立し、業界界にも進出して巨万の富を築いた。だが脱税容疑で2002年に逮捕され、獄中からその名前は一気に地に落ちてしまったことを付記しておく。

熱血弁護士 坂和章平 中国映画を語る(6)



坂和章平 熱血弁護士 坂和章平の「しん」をばつら映画に関する著書多数。NPO文化財団中法協会。

（おかり・しんらく）
 1949年1月長野県原松山町生まれ。大宮大学法学部卒。都市開発に関わる監修を数多く手がけ、日本都市計画学会「山川賞」、同年に日本建築学会「建築賞」を受賞。